第10回大阪府教育振興基本計画審議会

１　日時　　令和４年10月31日（月）15時00分から17時00分

２　場所　　ホテルプリムローズ大阪　３階　高砂　（大阪市中央区大手前三丁目１番４３号）

３　出席委員

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **委員名** | **職名** | **備考** |
| 浅野　良一 | 兵庫教育大学大学院　特任教授 |  |
| 小田　浩伸 | 大阪大谷大学　教育学部長 |  |
| 小酒井　正和 | 玉川大学　教授 | オンライン出席 |
| 沼守　誠也 | 大阪成蹊大学・大阪成蹊短期大学　執行役員・総務本部長 |  |
| 柳本　朋子 | 大阪教育大学　教授 | オンライン出席 |
| 有明　三樹子 | 株式会社りそな銀行　取締役 | オンライン出席 |
| 野村　卓也 | 一般社団法人　ナレッジキャピタル総合プロデューサー 株式会社 スーパーステーション　代表取締役社長 内閣府　イノベーション推進担当政策参与 |  |

４　内容

・ゲストスピーカーによるプレゼンテーション

・第２次大阪府教育振興基本計画の素案について

５．審議会概要

＜議題１＞

（１）大阪私立中学校高等学校連合会　辻本会長より資料の説明

1. ー　２　委員からの意見聴取

＜浅野委員＞

ただ今のご発表の中で、私立高校の授業料無償化が私学の躍進に繋がったとお話いただいた。ご存知の範囲で結構であるが、本年４月に入学された生徒の保護者のうち、授業料が無償であるから私学に来たという方たちはかなり多いのか。

＜辻本会長＞

多いと思う。所得の関係もあると思うが、以前、大阪私立中学校高等学校連合会（以下、中高連）で、「同じ授業料であれば、公立に行きますか、私立に行きますか」というアンケートをとった際、「私立に行く」と多くの回答を得ている。（授業料の無償化制度の後に入学者数の増加という結果が）出てきている点からも、アンケートの結果と連動していると、私たちは評価している。

＜小酒井委員＞

二点おたずねしたい。中高連の立場としてお答えできるかはわからないが、プレゼンテーションの中でICTに関わるお話をされていたので、それに関連して。一点目、例えばプログラミング教育といったような教育方法を受けてきた小学生が、今後中学に進学する中で、そのような子どもたちが受ける情報教育といったようなものを、私立学校のそれぞれ持っている教育、設置理念に合わせ、どのような形、方向性を持って子どもたちをさらに育てていこうとされているのか。

もう一点、これは公立も私立も変わらないと思うが、情報の科目の先生がいない点について、全国同じような状況で、本当に人手不足だと思うが、やはり供給する人材がどうしても少ないので、私立高校として、情報の先生をどのような待遇で雇用していくべきとお考えか、教えていただきたい。

＜辻本会長＞

一点目。小学校でプログラミング教育などを受けてきた児童を、中学校や高等学校でさらに育てていく基礎や器があるのかという質問について。

それはなかなか難しい。今の話で言いたかったのは、これは英語にも言えることだが、小学校と中学校の連携というものが全くない。中学生や高校生に、いかにICT教育を進めていくかということだけになっている。小酒井委員からご意見いただいたような連携が必要だと思っている。

二点目。情報処理の教育の免許を取る人は元々少ない。当校はたまたま講師の先生に来ていただいているが、この先生がより条件が良いところへ行ってしまうこともあり得る。来年、再来年と続けてもらえるのかといったこと。

もうひとつは、5年経ったら雇い止めできないという５年ルールがある。私学の場合はなかなかそこが難しいところ。そうすると企業等に適当な方がいるのか。その方に十分な手当てが支給できるかというような問題もあると思っている。したがって、人材確保がしんどい、苦しいというのが現状である。

＜野村委員＞

私学は建学の精神に基づいて運営されていると思うが、私学が無償化になったときに、建学の精神に基づいて、その学校にどうしても行きたいと生徒や親が言っていたのが、無償化によって子どもたちにとっては非常に幅広い選択になる一方で、集まってくる子どもたち、あるいは保護者の個性などが拡散し、学校そのものの個性に何か影響が出てくるということはないのか。

＜辻本会長＞

これは非常に難しい。様々なことを進めていくと、様々な生徒が入ってくる。無償化で色々な生徒が入ってくるということは、そういうことだと思う。そのために、本校のあり方、建学の精神を元へ戻して、オリジナルな姿でこれをやっていくことが、できるのかできないかということを今思案している最中。厳しくしっかりコツコツと、というのは今はもう流行らない。流行る流行らない、というとおかしな話だが、実際上、先ほど発言があった建学の精神で入ってくるのか、というようなことは、なかなか難しい。

各学校はやはり考えているだろうし、一方で、建学の精神がなければ何もないのと同じであるため、各学校悩んでいる。しかし、より鮮明にしたいという気持ちはみんなあると思う。そのようなことを調べたことはないので、自身の学校の話ではあるが。

＜沼森委員＞

会長としての中高連の立場と、自ら学校を持っているという立場から話していただいた。ある意味最後に出てきた、公立学校も含めて、生徒数が減少していくというのは、これは極めて大きく、如何ともし難く避けられない問題である。

全ての私学が、今もかなり頑張っていると思うが、どれだけの定数で耐えていけるのかというところ。経常費補助金も、何とか国並みにということもあったが、私学としたら、1000人いれば2000万円以上の差が出てくる。今まで高校の部分で言えば、７：３が６：４に変わってきた中で、厳しい大阪府の財政の中でしっかりとお互い協力しながら話をしていくかというのは根本的な問題だと思うが、そのあたりどのように考えているのか。

＜辻本会長＞

結局、生徒が何人規模であれば、今の私立の各学校が続けて同じ経営を続けることができるかは、学校の規模や教育内容によって違ってくると思っている。私の学校では、とにかく説明会をしっかり行い、去年並みの生徒か、あるいは定員をいかに確保するかに取り組んでいる。

ここで考えなければならないのは、ダウンサイジングしていって、逆に教育の質が高まるかもしれないが、ダウンサイジングしていくという方向性が今はない。去年並みに頑張る、ということになっているので、やはりダウンサイジングする必要がある。これは生徒数の問題であり、一般の企業のように、生産して商品あるいはサービスを提供する、という話にはならない。そうなると、やはり大阪府の基本政策のようなものにむしろかかってくるのではないかと思っている。

＜小田委員＞

支援教育の専門的な立場から少し質問させていただく。小学校又は中学校で支援学級に入ってる子どもたちが、近くの高等学校に行くことが多く、小学校、中学校で支援を受けていた子どもたちが、私学に相当数通っていると思う。そういった意味では、ニーズが多様化している状況があり、画一的な対応が難しく、個別対応が必要であったり、今までにない対応も必要になってきてるように感じる。

私も時々、私学に行く機会があるが、公立のような形での支援学級や支援の個別対応には難しい部分があるように感じる。私学での多様なニーズがある生徒たちへの対応ないし指導、支援が非常に大きな課題になっているように思う。教育内容はもちろん、教育に関する部分で、公立と連携するなど、私学での支援体制も重要となる。公立ではある程度の支援体制があると思うが、私学において対応されていることや、お考えがあれば教えいただきたい。

（会長）

現時点では、公立の支援学校や支援学級と同じような形にはなっていないが、一定数、そのような支援が必要な子どもたちが存在する。入口の段階で、誰が入って、誰が入ってはいけない、といったようなシャットアウトすることは、決してすることはないが、その中で、そういった支援が必要な子どもへの支援として、出口の段階でサポートが必要だと考えている。

実際、出席日数の３分の１を超える場合は単位を与えることができるが、超えない場合は卒業できないことになる。卒業できるかの基準の見直しが必要な段階まで来ているように感じる。SC（スクールカウンセラー）を配置したり、様々な主体と連携もしているが、学習上の問題や、心身の状況について、学校では判断ができない現状がある。支援学級という形ではないが、できる範囲で私学も頑張っており、会議等でも意見交換している。これらの課題については、今、真剣に検討している最中である。

＜議題２＞

（２） 事務局より資料について一括で説明

（２）―１　委員からの意見聴取

■第１章から第４章

＜小酒井委員＞

まずは2章の14ページの振り返りの総括について。特に心の教育とキャリア教育については、努めてきたという形で記載されており、様々な施策をうってきたと思うが、キャリア教育といった観点で「夢があるか」という質問に対し、夢があると回答する子どもの割合が年々下がっているというデータもある。ただ、それは経済が厳しい等、様々なことがあって夢が持てないということは、あくまで一側面だと思っている。

自分の将来は自分で学んで手に入れていくといったことが、しっかり理解できていると、その割合が下がらないかもしれないし、本当に世の中全般であまり夢がない状態になってしまっており、そのように答えているかもしれない。

そういったようなところまで言及するかどうか悩ましいところであり、少し気になった。

もう一点、個別の論点で言うと、10ページのところに、教員の力とやる気を高めますっていうところがあって、やはり時間外在校等時間が長期化しているという課題に対して、今後の対応が言及されているが、実際のところは先生が何でも屋になってしまっている現状があり、そのようなことをきちんと紐解いて、直していく方向性が大切。

また、現実問題として、先生も結婚されていたり、特に先生同士で結婚されているなど、ご家庭がある方々も多いと思う。子育て等とその仕事の間にギャップがあって非常にしんどい思いをしているという子育て世代の先生方もいると思う。そういった観点から、少し記載が足りないように思い、実際、先生方も子育てしている当事者でもあるので、子育てしやすい職場環境あるいは周りのフォロー体制作りも考えていくことが大事だと感じた。

＜沼守委員＞

全体を作成していただき、大体の流れ、骨子が固まってきたように感じている。ただ全体を読む中で教育振興基本計画は、以前から申し上げているように、保護者を含めて色々な方が対象となることを考えると、どうしても全体的に幼児教育の記述が薄いように思う。個々の様々な事情を捉えれば、そうならざるを得ないかなとも思うが。

まず冒頭でも、小・中学校の教育の記載があるが、例えば4ページの市町村との連携の中では、3行目に、幼児教育、義務教育についての記載が少しあるが、トータルで見ると小・中学校から始まっている感が否めない。また、その記載だけでなしに、他の部分でもそのように感じる。子どもたちが生まれたこところから全部、就学前の教育から小・中学校と続く記載が必要では。先ほどの中高連の会長からも話していただいたが、高校については私学の記述はあるが、就学前教育については、私学の記述も薄いように思う。

私学の幼稚園、保育所では、かなり配慮を要する子どもを預かっている。その辺りも、府は私学と関わりながら取組みをしており、トータル的に、いわゆる私学支援をしているということを踏まえてわかるように記載すれば、もう少し子どもたちの年齢層がトータルに関わりがあることが明確になるかと思う。全体的な感覚として、もう少し就学前の書きぶりを幼児教育という文言に統一しながら、きちっと入れ込んでいく方が、いいかと思ったところ。

二点目。せっかく17ページで、大阪・関西万博に関する記載が少しあるのだから、一人ひとりの望む生き方を考え、可能性を最大限に発揮できるようにしていく、といった大阪・関西万博のコンセプト、テーマを、最初の章で記載してはどうか。それらを引き続き強調していくことといったことを、途中で唐突に出すよりも、最初にそういった考え方を入れておくと良いと思う。

3点目、14ページの振り返りの総括について。分かりやすくなっているが、基本方針と比較すると、先ほど指摘があった心の教育に関しては出てくるが、5段落目、基本方針の豊かでたくましい人間性を育むための項目で、心の教育がでてくる。出方が違う。

例えば体力向上や生活習慣に関して、健やかな体を育むこととして、体力向上に取り組んできたという比較で言えば、そういう全体的な総括でまとめた方が、読む人にとってはわかりやすいように思う。ここの部分だけが、他のところと書きぶり、主語述語が違ってきてるので、そこも少し工夫すれば、もう少し前段の部分との整合性が取れるだろう。

あと私学については、先ほど申し上げたように、高校での支援等には入っているが、公立または私学の幼児教育での支援なり、また小中での支援といったところも当然行われていると思うので、その点も記載した上で、高校の記載に移るのが良いのではないか。全体的に高校に偏ってるように感じるため、工夫していただけたらと思う。

＜柳本委員＞

全体的にわかりやすくまとめ上げられ、より思いが伝わっていくように感じる。

３点ほどあるが、一つ目は先ほど沼守委員のご意見とも重なるが、幼児教育について、最初から幼少中と出てくるところもあれば、小中高からで、幼児教育が加わっていない部分もあるので、そのあたりを統一されると良いのではないか。特に第1章から第4章までは小中高、就学前から高校までの子どもたちの教育内容に関するものだというようなことが書かれているので、そのことがそれぞれの方針のところで伝わればいいと思う。

それから二つ目、振り返りの総括について。最後のパラグラフのところで、前回の小酒井委員のご指摘にもありましたような、広い視野からの振り返りが入れられていて、重要な内容が明確に的確に表現されていると感じた。ただ、それぞれの取り組みが書かれているが、突然取り組みの内容を入れるよりもどんなグランドデザインで取り組まれているのかということを、はじめに触れられておくと、読みやすいと思う。

例えば1ページ目のところには、第1章の計画の策定に当たってというところで、第1次計画では、こんなグランドデザインでというようなことが書かれているので、そういったことをもとにそれぞれの取り組みがされてきた、というような記載があれば、より分かりやすいのではないかと思う。

それと三つ目。大阪の教育を取り巻く状況についてかなり詳しく文章で書かれていて良いと思う。そうすると今度は第4章の大阪の教育が育む人物像について、大阪カラーがあまりにも出てないことが逆に強調されるような気がした。大阪といえば、前も有明委員がご意見されていたようなものづくりのことや、あるいは在留の外国人の割合が高いことなど、他にも大阪の特徴はたくさんあると思う。

そういった大阪の背景をもとに大阪の教育が育む人物像が示されるとより説得力があるのではないか。

＜有明委員＞

ここまで仕上げるのに、事務局の皆さんも大変なご苦労があったのだろうと思いながら、文章に目を通させていただいた。また、事前説明の際にも、やはりこの基本方針のところは、抽象的にしなければならず、事業計画で具体を落とし込むといったこともお聞きした。

その上で、あまりこれ以上無理を申し上げるのもいかがかと思いながら、少し気になる点をお伝えしたい。

まず、柳本先生がご意見されていたように、冒頭はしっかり大阪について入れていただいたが、これが、それ以外にどのように繋がっていくのかと感じる。何度かものづくりについて申し上げているが、今、朝ドラもまさに東大阪が舞台になっていて、ねじからロケットまで作る技術を持ってるのが東大阪であると、最近様々な機会に目にする。それは一つには細かな技術から先進的な技術まで幅広い分野に提供できる、もの作りに携わる人たちがいるということ。大阪としてそういう幅広い分野で活躍できる人たちを育てていくといった意味で、こうした観点もご参照いただければと思う。

一方、10年前の方針には書かれていないが、今回新しく入った部分はどこかと考えると、やはりIT化のところと教員の働き方改革については、おそらく10年前にはなかった部分かと思う。先ほど働き方改革についてご意見があったように教員のワークライフバランスといった個人の生活の目線は全く入っていない。教員も一市民であり一社会人であり、そういった私的な生活も含めて子どもたちのモデルになる教員だと思うので、そこも含めてもう少し触れても良いかと思う。

また、最後のIT化について、最近WEB3.0という考え方について耳にする。詳しくはないが、WEB2.0がインタラクティブ、WEB3.0というのは、個々がすべて繋がっていって、色々なものをクリエイティブしていったり創造していったり、変な話、お金や銀行なども要らなくなるような世界がWEB3.0。そういったこの10年で間違いなく加速度的に進んでいくことが想定される中、その加速感があまり感じられないことが、少しもったいないように思う。

例えば、教育学部での教員養成カリキュラムを通じて教員免許をとった人たちで、やりくりしていく世界では追い付けないような教育現場が、もうすでに来ていると思う。やはり外部環境との連携の中で、地域、行政、大学、企業といった記載があるが、特に企業との連携というものは、この10年では大きく取り上げていかなければならないのではないかと危惧している。

冒頭のプレゼンを聞いていても感じたが、学校の先生方でやりくりすることを前提として学校教育、特にIT化を進めていこうとするとおそらく日本はさらに後進国になってしまう。企業のまき込み方について、お金を払ってまき込む、ボランタリーでまき込む、この両面からもう少し踏み込んで、学校教育を支えていくネットワークを作っていくことを進めていただきたい。

＜野村委員＞

内容をまとめて文章化するのは非常に大変な作業だったと思う。

この振り返りのところの5段目、14ページで、心の教育に関して、3行目にＳＣやＳＳＷといった記載は、おそらくスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの略だと思うが、これだけだと一般の人はわからない。また、大阪の教育を取り巻く環境の背景として、少子高齢化やSociety5.0、グローバル化、コロナといった記載があるが、大阪ではなく日本全体で考えると、これからの子どもたちが向き合っていかなければならない問題は、これから起こる可能性があるもの、例えば、気候変動による自然災害や洪水、パンデミックや国際紛争などによって引き起こされる食料やエネルギーの問題などだと思う。特に大阪の食料自給率はカロリーベースで言うと2％ぐらいで、ほとんど自給できていない。Society5.0は科学技術を中心にした未来の日本の社会のコンセプトで、グローバル化というのはどちらかというと経済とかビジネスの観点から見た視点だと思う。

そういう意味ではICTの教育だとか英語教育というのはもちろん大事だが、どちらかというと、それは知識や技能の分野で、今の子どもたちが本当に養っていかないといけないのは、一言でいえば「生きる力」みたいなことだと思う。そういう意味で捉えると、21ページあたりに入れるのがよいのではないか。

国の主な動きの中で、例えば学習指導要領とか今回の中央審議会の答申に書かれているが、私はやはり探究学習というか、総合的な探究の時間といったものが設定されているのではないかと思う。その点に触れられていないので、記載する方がよいのではないかと思う。また、それを受けて、その次の第５章の色々な取組みに繋がっていることが、実はあるのではないか。

探究的な学習というのは非常に難しく、おそらく今の学校の先生方や保護者も、実際に何したらいいか分からないといった声や、探究学習として学校の中で何するのかといった疑問も非常に多いと聞く。一方で、探究学習がきちんと行われている学校の子どもたちは非常に自立的で、一説によると、全国の学力テストでも比較的高い結果が出ていると聞いたことがある。自分で学ぶ力や自分で問いを立てるといったことが、これからの子どもたちにとって非常に重要なことだと思うので、探究的学習を、国の動きの中、あるいは第５章の中での記載が必要ではないかと思う。

Society5.0もグローバル化も大事ではあるが、もっと大きく、予測不能であることや先行き不透明であるといったことが、大阪だけに限らず、日本全体の話であるが、その中でどうやって生きる力を身につけていくかといったことは大きな視点で必要なことだと思う。

＜小田委員＞

ここまで整理いただいて本当にわかりやすくなったと思う。私も14ページの振り返りの総括について、二点、お話させていただきたい。

まず、1ページの計画の策定にあたっての2段落目に、「チャレンジ」「自立」「自律」といった３つの目標が掲げられている。これは第一次計画の一つの大きなキーワードであったと思う。14ページの一番下の段落で、そういった目標を意識して書いていただいているように思うが、キャリア教育が主語となっているので、キャリア教育に限定された記載に感じてしまう。この大きな３つの目標という視点で、ここで整理されていることが、この総括的にも大事かと思う。

もうひとつ、真ん中の支援教育に関して、内容についてはそのままで良いが、私個人的には、このともに学ぶための新しい学びの場の制度ということで、平成30年に高校通級ができた。これがともに学ぶための一つの大きな新しい学びの場の制度として変わったところだと思う。これは一次計画にはなかったことなので、入っていないのかと思うが、平成30年から入ってきた非常に大きな出来事に思う。一次計画にはないのかと思うが、この新しい10年間を考えると非常に重要ではないかと思うので、提示させていただいた。

以上、二点お伝えさせていただいた。

＜浅野会長＞

第1章から4章まで様々なご意見をいただいた。一点目は、幼児教育として私学関係、大阪らしさ働き方改革そして企業との連携、探究的な学び、支援学校、支援教育。やはり小・中学校の公立がメインとなってしまっており、狭い範囲の枠組みから外れるところは発想が展開しにくいところがある。今挙げられた言葉については、その周辺、いわゆる公立小・中学校の外の部分だと思うので、意識して記載されるのが良いと思う。

また、今、委員の方からもご意見があったが、教員の働き方改革については、やはり、業務の適正化といった部分と教員の生活の観点から取り組むといったこと。あるいは企業との連携についてもただ単に企業と何か一緒にするといったことよりも、学校から外に、もっとたくさんの企業があるので、その辺りまで目を向けていってはどうか、といったご意見だと思う。

その辺、今いただいたご意見について、加筆いただけたらと思う。

■第５章

＜宿南委員＞※事務局で代読

本日ご欠席の宿南委員の方から事前に意見の方をお伺いしておりますので、ご紹介をさせていただく。

まず30ページ、重点取組１について、個別最適な学びと協働的な学びの進化の手法として小中学生の学力学習状況調査の把握分析とあるが、その分析後のデータをどう活用していくのかが重要である。キーワードとしては「活用」も含めるべきではないか。

二点目、36ページの基本方針4の中で、地域連携については触れられているが、コミュニティスクールの記載がないのが気になる。地域や保護者との関わりについては重要な要素であるので、その点を要素として追記してほしい。

＜小酒井委員＞

まず全体のところでひとつ、気になった点がある。もともと書いてあったようだが、29ページの基本方針１のところで、確かな学力の定着と学びの深化という所に、令和の日本型学校教育というような文言が出ているが、やはりまだまだ、何を求めているのかという事と、それで成績ナンバーワンを狙うという話等の関係性等が、まだまだ世の中にきちんと理解されていなのではないか、といったような事もあるので、何かしら言葉を、こういった所でも、探究的な学びをするなどしていくことによって、実のところを言うと、テストなど、そういったところの結果も出てくる事を、最近は指摘されはじめていますし、まだ一方でエビデンスが無いので少し危ないかなとも思ったりもしますが、学びの方法が変わったことによって、どのように成果が問われるのかといったような所も、きちんと言及した上で、確かな学力の定着といった事を語れた方が良いというふうに思う。

特に今、この50年間とは、今現在、親御さんの世代が、言ってしまうと昭和時代の教育を受けてきた最後の世代だったりもするはずなので、徐々に変わってくるとは思うが、まだまだその新しい内容や、新しい教育がめざす所については、受験に役立つといった話で矮小化されやすい世代でもあると思うので、そのような事をきちんと説明できる所を随所に残した方が良いのかなと思った。

少し個別論点みたいな話になってしまうけれど、先ほどもあったが、ＩＴの用語など発達が激しいと、私もその通り思うのですが、例えば、WEB3.0といった言葉は、移り変わりが激しい典型的な物なので、私は使うのが怖いが、重要なのは、常に新しいものに切り替えて、乗り換えていく力を教育で持っていないといけないのかなと思う。特に何かのプロみたいなのが育ってしまうと本当にロックインされて変えることができなくなる情報システムができちてしまうというのは、我々ビジネスの人間は何度も経験したし、実を言うと色々な組織で起こっていると思う。

だから今、新しいものに乗り換えていくことが、すごく重要な世の中になっていると思う。そういった新しい技術に乗り換える事を、後押ししてあげるとか、ちょっとお金を出す、といったような事をしていかないといけないと思う。例えば、国では個別最適、１人１台と言うが、非常に大事なのはAIを使った教材だったりする。AIを使った教材となった途端に、いきなりお金がないと言って、結局前みたいな、先生がデータを見て何か考える事なんですかとか、結局先生の仕事が増えたら意味がなくて。いかに先生をサポートする形で、例えばAI教材とか買いたいもの、やりたいとなった時に、それを手伝ってあげるとか、あるいは、今後すぐにもっと良い物が出てくるので、それに切り替えるとか、今考えつかない、もっと教育を豊かにして、先生の仕事を楽にする物があると思う。そういった物を取り込んでいくという姿勢そのもの、それを投資する姿勢を府が持っているという事を言えた方が良いと、私は思う。

特に今後、英語の発音を判定するアプリだとか、そのような物もどんどん出てくるであろうし、自動採点といったような物もほぼ実装されてきていたりもするし、様々な面で、先生の時短に繋がる物が、次から次へ出てくる以上、その次から次へ出てくる物を取り込むところを重点取組にした方が、私はICTを教育現場に持ってくるという意味では良いのかなと思った。

次に、やはり親御さんが心配なのは、ICTを活用するとなると、あまりよくない事例だが、いじめのような問題はすごく心配だと思う。今すごく、色々な先生がデジタルシティズンシップという言葉の中で、教育をちゃんとしていこうと、デジタル世代の子ども達が世の中で生きていくためにはどうしたら良いのかを、自ら主体的にルールを考えていく、教え込むというのではなく自ら考えてルールを作ったりとか、そのような趣旨、参加していくという意味合いのアプローチに変わってきたものが、デジタルシティズンシップだと思う。そういったことを、豊かな心と健やかな体といったところに入れ込んでもいいのかな、というふうに、私自身は思った。

特に私自身の考えでは、探究的な学びというものは、総合的な探究の時間に落とし込みすぎるのではなくて、探究的な学びを、各科目教科といったような所に、随所に発揮しなければならない学びのスタイルだと思う。自らがテーマを決め、自らが学ぶからこそ、学ぶということに対して主体的になれると思うので、探究的な学びは色々な科目に入ってくる。少し、こういった所を基本方針で、何か大きく打ち出すべきではないか。教育の中、クラスの中で聞いて覚える、といったものから、違ったものになるひとつのフラッグシップみたいな形で取り上げられるといいのかなと思った。

＜沼守委員＞

第5章は難しいと、読みながら考えてきた。基本方針の設定に当たって、28ページに築き上げてきた大阪の教育の成果をしっかりと継承とある。

29ページの確かな学力と学びの変化に、これからの取り組み、方向性は書いてあるが、教育の基本は何かと思ったとき、これまで繋げてきたのは、いわゆる人間性を育てていくこと。そしてそこには、当たり前、普遍的な事として、基礎・基本の定着を図りながら、とある。変わらない物の書き方も、全体像を見るために、今度はこう変えていきますと、見える形で書かなければいけない。29ページでも「これから」の部分は出てくるが、「これから」の根底にある教育の源流は何か問われた時に、それを表す言葉は人間性で、いわゆる全人格を育てることが根本にあって、さらに、どの子たちもしっかりとした基礎学力をつけますよ、という流れを書いている、というようなことを全体的に記載した方が分かりやすいと私は感じている。重点取組は、これから事業計画に落とし込み、膨らませていくと思うが、基本となることも、事業計画にいかしていく方が良いかなと思う。

同じようなことで、教員のところになる、37ページ力と熱意を備えた教員と学校組織づくりの所で、当然、子どもたちに最前線で向き合う教員を志願する人数が全国的に減少にある中、引き続き、熱意ある優秀な教員の計画的な確保・育成をめざしますということで言えば、社会全体の、志願する人数が少ないという問題もあるので、育てないといけないという部分もある。また前に、大阪は全国平均に比べて志願率高いというのがあったが、実際はそんなに高くない。全国が低いということもあるが、保護者のニーズ、多様なニーズの変化に向き合う資質・能力の前に、教員の資質でもっと必要な物があると思う。

それがあった上で、記載の重点取組のような資質・能力があるのであって、大学、また高校で、きちっとした教員の基本を学んできて、そこから教育委員会なり、現場で育成が始まるという意味では、その大学との連携なり、もっと協力して学生を育てますよというのが、入っても良いかなと思った。大学と教育委員会の取り組みはもっと強烈に力を合わせながら、教員の資質向上をめざすべきだという意味では、その視点をもっともっと大事にすべきなのかなと思っている。

あと40ページの私立学校の振興のところ、高校に特化した部分に、全体的な幼児教育の部分から書き込んで欲しい。そして難しいと思うが、それらを守っていくという形と、拡充すべきところは拡充するという形の視点で、書き込みをご検討願えたらありがたい。

＜柳本委員＞

基本方針のところで、具体的な項目とそれに対応するキーワードまでお考えいただきありがたい。

色々、重要なキーワードを入れていただいてると思う。お願いしたい点は、例えば重点取組の１や２について、これからさらに文章化されていく中で、あるいは具体的に細分化して取り組みが進んでいく中で、バラバラになって繋がりが無くなるといったことを防いで欲しいという点である。例えば基本方針１の確かな学力の定着と学びの深化の、重点取組１で書かれていることと、重点取組２での、１人１台端末の活用による学びの充実などは、互いに関連しているところではないかと思う。

また、そのキーワードの中の読解力や情報活用能力については、できるだけ広い視野でとらえて書いていただけるとありがたい。なぜなら読解力と言えば主に文章の読解力と捉えがちだと思うが、読解力の中には文章だけではなく図やグラフとか表などの情報を読み取る力が含まれると思う。

最初の、自らの考えを発表し共有する機会というのも、これは授業改善に繋がることなので、“授業改善”というような内容が入ればいいと思った。

それからあと二点。36ページ、基本方針４の多様な主体との協働のところで、重点取組⑬の3番目、高大連携とあるが、これは高校生の学びをさらに深めていくというための高大連携だと理解した。ただ大学は高校だけではなく、幼少中とも大学生を通じて繋がりを広げていくことも可能ではないかと思う。教員養成の大学生はもちろんだが、教員志望ではない学生でも、社会に出ていく前の段階で学校との関わりを経験することで、今後社会人になってからでも、学校と地域の繋がりをより自然に受け入れられると思った。

37ページの基本方針５、力と熱意を備えた学校教員と学校組織づくりについてですが、重点取組⑮から⑰までの内容で、教員の確保や、資質・能力の育成、学校組織のあり方、働き方について挙げられている点は良いと思う。ただ教員や学校が、意識改革とか働き改革に取り組むと同時に、やはり今まで他の委員方からも御意見があったように、教職の魅力化、魅力の発信というような内容もどこかで入れていただければよいと思った。

ぜひ大阪の教員の魅力化を頑張っていただき、大阪の教員の確保に繋げていただきたいと思う。

＜有明委員＞

先ほど申し上げた内容でほぼ全部であるが、皆さんの話聞きながら、改めて一点だけ感じたことがあったので、それだけ付け加えさせていただく。今後の学校教育だけでなく社会を考えたときに、先ほどからAIという言葉が出ているが、やはりAIが我々人間の仕事を取って変わるというのは、本当に当たり前になっていくと思う。

その中で、どちらかというと個別最適な教育というのは、おそらくAIができる部分なのではないかと想像しており、教員の方々に何をしていただくのかということが非常に大事だと思っている。

今回コロナの中でのコミュニケーションを経験して、WEBも便利だが、一方で、やはり会って人の熱量を感じながらコミュニケーションをとることは非常に大事だと感じた。

熱量を持った先生をどれだけ育むのか。やはり一番大事なのは熱量で、そういう熱量を持った方々が、様々な武器を使いながら子どもに教育ができる形を作っていかなければいけないと思う。皆様の話を聞きながら、改めて感じたということで、付け加えさせいただく。

＜野村委員＞

基本方針1の「学びの深化」のところの主体的で対話的な深い学びというのは、極めて重要なポイントだと思う。

基本方針4で、多様な主体との協働は、私は基本方針1と4はセットになった一対のものであり、これが一つの探究的な学びの回答になりうるのではないかと思う。

探究的な学びとは何かというと、基本的には「自らで問いを立てて、その課題を解決するために色々な情報を収集して分析をし、それを仲間と協働しながら、解決に繋げていく」ことだが、それを実行する能力は、やはり特定の科目や教科の中だけでは養えないのではないかと思う。よって、外部との連携は極めて重要だと思う。

以前もお話ししたかもしれないが、私がいるナレッジキャピタルに、島根県立隠岐高校の生徒と先生が来られて、今回4回目になるが、島根県の中のリソースを題材にして、色々なアイディアを考える。それは事業のことであったり、あるいは観光誘致であったり、それぞれテーマを決めて、調べてまとめて、一泊二日で大阪に来てプレゼンテーションする。私のところと、大学と企業と三か所を回るそうだが、自分たちの島の中だけでなく、できるだけ広い視野の人たちの意見を聞きたいということで発表しに来ている。それに対して我々が、例えばプレゼンするときに、みんな原稿読んでいるから、原稿を読まないでちゃんと覚えた方が良いとか、タイトルが魅力的ではないので、みんなの興味を惹けないなど、様々なことを好きに意見している。そういった意見を持ち帰り、ブラッシュアップして、最終的に島内で発表しているが、それはおそらく探究学習の一つとして実施されていると思う。今例示させていただいたようなことが、外部との、多様な主体との協働であり、やはり実社会や実生活というのは、非常に複雑に絡み合う中に様々な問題があり、その問題を俯瞰して捉えるということが重要で、横断的総合的に捉えるような能力がこれから必要だと思う。それがまさにその探究学習の一つで、国も今回の教育指導要領の中で記載している。

それをあえてそのまま直接用いて、これに対する答えという形で出す必要はないかもしれないが、ただ、大阪としての独自の見方として捉えても、そういう視点は非常に大事だと思う。主体的対話的で深い学びというのは、ひとつはもちろん学校の中での色々な教育があるが、やはり一方で、その多様な主体との協働という外部との接点、これは生徒だけじゃなくて先生も含めて、外部との接点というのがますます必要なのではないかと思う。

＜小田委員＞

31ページの重点取組３に、障がいのある子どもたちの教育環境の充実について記載いただいた。ここは本当に大事だと思っている。その中に記載のキーワードについて、支援学校での通級による指導、支援学級とあるが、ここに通常の学級というのを入れていただきたい。この通常学級での集団作り、授業作りの充実が、通級や支援学級に大きく影響してくる。ある意味では、支援教育の根幹というのが通常の学級での集団作り、授業作りだと私は感じている。そのあたりの充実を前提とする一方で、必要な子は通級や支援学級ということもあると思っている。そういった意味で、ここへの記載が可能か検討されたい。

もう一点、キーワードとして、ここに入れるべきかわからないが、先月、文科省の有識者会議の中で、特定分野に特異な才能のある児童生徒について審議のまとめが出された。ここがやはり日本が遅れてきた部分だが、やっとここまで来たなという思いだ。

ただ、これに関してはやはり一定数この特異な認知状況、つまりIQは130、140あるが不適応を起こしてしまっているというケースがある。ギフテッドという言い方もするが、こういった特異な才能ある子どもたちをどのように支援していくか、これはおそらくICTとも関連するだろうし、他機関との連携というのも関わってくる。このあたりが、この10年間の中で課題性として出てくるのではないかと思っている。これは、小中高全部に関わる。ここで記載するのが良いか、わからないが、これは今後の大きな課題になってくると思うので、記載しておくことが大事だと思う。

＜浅野会長＞

5章について、色々とご意見いただきました。特にキーワードについてのご意見が多かったように思う。第１章から5章についてのみなさんのご意見を聞いて、大枠としてよくできてると思う。それをさらに良くするために、今日は色々なご意見があったと思います。

次回の審議会では、今のご意見を踏まえた事務局の修正案を提示いただく予定である。

従いまして事務局においては、今日の意見を踏まえて、次回以降の審議の準備を進めていただきたい。

（３）閉会

○　教育長より、閉会にあたりあいさつ。

○　次回審議会11月28日月曜日　午後２時からの開催。

○　閉会